

遊 園

旭 日
皇帝、廷臣等。ファウスト、メフィストーフエレス、上品にして而も
目立たず、風に協(かな)う服装をなす。二人とも跪(ひざまづ)き居る。

ファウスト

陛下、あなたはあの幻術の炎の戯れを御勘弁下さいますか？

皇 帝(目配せして立ち上がらしめつつ)。

わしはああいう笑談が大好きだ。----
だしぬけに、燃え立つ境(さかい)に身を置いたので、
身はプルートになったかとさえ思われた。
炭黒の闇夜の中から一つの巖底が現れて、
それが数々の小さな炎で燃えていた。此処彼処の岩間からは
幾千となき猛火が渦巻き上がって、
ゆらめきながら出合って一つの円天井をなしていた。
焰の舌は最も高い円頂閣まで舐めてのぼり、
その円頂は且つ成り且つ崩れていた。
火の振柱(よじればしら)の並ぶ広々とした間を通して、
民の長い列が動いて行くのが見えた。
それが大きな円を描いて身に近寄って来て、
いつもの通りに身を敬ってくれた。
宮中のものも、中には一人ならず見受けられた、
わしは幾千のザラマンダーの君主のような気がした。

メフィストーフエレス

陛下、実際その通りでございます！なぜと申せば、四大がみんな
御尊厳を絶対のものと認めて居りますから。
従順な火はさっき御験しになりました。
精一杯猛烈に荒れている海に飛び込んで御覧なさい、
おみ足が真珠の多い底に触れるとすぐに、
忽ち水が湧き立って、一つのすばらしい圈(わ)が出来上がります。
上にも下にも、紫に縁とられた、明るい縁の、蕩揺(とうよう)する波が、
膨らんで世にも美しい御殿となるのを御覧になるでしょう、
中心になるあなたを囲んでですよ。一足毎に、
何方へ御歩きになるにしろ、御殿はついて参ります。
壁そのものも生(いのち)を楽しんで、
矢のように群れ動いたり、と往きかく往きしたりする。
海の化物どもが、新しい優しい光を慕って押し寄せる。
それはぶつつかる、が、孰れもはいることは許されない。
其処には金鱗の龍が色あやに遊んで居る、
鮫が大口を開く、と、あなたはその顎(あぎと)を覗いてお笑いになる。
今でも御殿の者は御側で嬉しさ一杯に暮らして居りますが、
これほど大勢の賑わいは、あなたはついぞ御覧になりませんでした。
それに、貴方は最も可哀い者とも離れていらっしやらない----
物好きなネロイスの娘達が、とわに鮮新な、
華やかな御殿を覗きにやって来る、
若いのは面はゆ気に、色気を含んで、魚のように、
年上のは賢(さか)しく。もうテーティスにもそれが知れる、と
彼女(あれ)は第二のペーロイスに手と唇とを差し出す。----
それからオリュンブ山上の御座を.....

皇 帝

その虚空の世界は、お前に任せて置く----
あの玉座には早過ぎるほどに即(つ)かれるのだ。

メフィストーフェレス

最高の王者よ、それに、地(ち)は既に領しておいでになります。

皇 帝

まあ何という幸運が御前を此処へ連れて来てくれたことだろう？
千一夜物語から抜け出して来たような奴だな。
お前もシェヘラツァーデに劣らぬほど才に富んでいるなら、
あらゆる恩寵にも優れた最高の恩寵を保証してあげよう。
いつでも用意して待っているが好い、この昼間の世界は、
毎度のことだが、ひどくわしの気に入らぬことがあるからな。

宮 内 卿(急ぎで登場)

陛下、私は私の生涯のうち、これほどな最上の幸福を
奏上することがあろうとは、存じも寄らぬことでした。
それは私の心をひどく嬉しくして、
満悦して御面前に出させるのでございます----
勘定はみんな済んでしまいました、
高利貸しどもの爪も丸めおおせました、
あの地獄の呵責ももうおしまいでございます。
天国でもこれ以上に晴々することはございますまい。

兵 部 卿(急ぎでこれに続く)。

内金払いにして給料は片付けました、
全軍は新たに契約を致しました、
傭兵どもは新鮮な血が循(めぐ)る気持ちになって、
酒場の爺も女子(おなご)どもも福々でございます。

皇 帝

お前方の胸は如何にも楽々と呼吸(いき)をして居るな！
皺の寄った顔まで晴れやかになりおる！
お前方は如何にもいそいそと参りおるなあ！

大 蔵 卿(参り合す)。

この者どもに御尋ね下さいまし、二人がこの仕事をしたのでございます。

ファウスト

宰相様が然るべく存じます、この事を奏聞なされるのは。

宰 相(遅く歩みつつ来る)。

老年の日になって、仕合わせな目を見ることだて。----
そんなら運命をたたみ込んだこの文書を、聴きもし見もしていただきます、
これがあらゆる悲歌を歓喜に変えたのでございますから。

(彼朗読す)。

「凡そ欲する者にはすべて知らせめよ----
この紙片は千クロネンに値す。
確実なる担保としてこれを保証するものは、
帝国領内に埋蔵せられたる無数の財宝なり。
この豊かなる宝を直ちに発掘して、
これを兌換の用に供すべき用意成れり」。

皇 帝

不屈な仕業が、大それた詐欺が、あるらしいぞ！
このカイザーの親署を誰が贋造した？
これほどの犯罪が刑罰を免れたのか？

大 蔵 卿

思い出して御覧なさいまし！御自分で親署遊ばしたのです。
それも夜前のこと。あなたはパンの大神になってお出ででした。
宰相は私どもと一緒に御側へ寄ってこう申しました----
「祭りの尊い御慰みが民の幸いとなって御身につきますよう、
ほんの一筆御願いいたします」と。
あなたははっきり御書き下さいました、そこでその晩のうちに
奇術を心得たものが早速何千と複写致しました。
この御慈悲が万民に行き渡るように、
私どもはすぐにありだけの種類の札にこれを捺したのです、
十、三十、五十、百とみんな出来上がって居ります。
それがどれほどの民を喜ばせたかは、なかなか御想像が出来ますまい。
この都を御覧なさい、いつもは半分死んだように、黴臭かったものが、
みんな生々して、楽しみ浮かれながら騒ぎ廻って居るじゃございませんか！
あなたの御名前はどうから世間を仕合わせにしていらっしゃいましたが、
それでも人がこんなに親しみを籠めてそれを拝見したことはついぞありません。
御名前の文字は、今度という今度こそ、並(なみ)の字と段違いのものとなりました、
この記号(しるし)のもとに、何人も祝福を得るようになったのでございます。

皇 帝

そうしてそれが人民の間に、立派な金(きん)として通用するのか？
軍隊や宮中でも、それが全金払いをするに足りるのか？
ひどく怪訝(けげん)なことではあるが、それなら認めて遣らずばなるまい。

宮 内 卿

この駆け出す奴を引き留めて置くことは、所詮出来ない相談でしょう。
電光(いなびかり)の速さで、それは奔(は)せ散りました。
両替屋の店はあけっぴろげになって居る。
其処で一枚一枚の札を、金貨や銀貨に
取り換えて差し上げる、勿論割引はありますがね。
さて其処から駆け付ける先(さき)は、肉屋だ、菓子屋だ、酒屋だ。
世界の半分はただ御馳走のことばかりが頭にあって、
他(ほか)の半分は仕立て卸しの着物を着て威張っているように見えますね。
小売屋が裁つ、裁師(たちし)が縫う。
「カイザー万歳！」で酒屋は沸き返る、
其処では煮るやら、焼くやらで、皿がちゃらちゃら鳴って居ります。

メフィストーフェレス

露台を一人ぼっちでぶらつく男は、
素的な美人がすばらしくめかし立てて、
高慢な孔雀羽の扇で片目を隠して通るのを見るでしょう、
その女が私達ににったり笑いかけて、こういう札に横眼を遣います。
頓知や弁口(べんこう)で口説くよりも早手廻しに
大した恋のお情けが頂けることになる。
財布や金入れを持ってうるさい目を見るにも及びません、
札一枚なら楽に胸のところへも入れて置かれる、
其処へ色文と一緒に入れて置くにも便利だ。

坊さんは殊勝顔して祈祷書の中に挟(はさ)んで置く、
兵隊は前よりも早く廻れ右が出来るように、
早速腰の胴巻きを軽くする。
陛下よ御宥し下さい、折角の大事業を
下らないことにするように見えてすみません。

ファウスト

あり余る宝は、凝り固まって、
御国の地の底深く時を待って居ります、
用いられずに寝て居ります。遠大を極める理智も
これほどの富を探るには貧弱極まる埒に過ぎません、
空想がその最高の飛翔を逞しくしたところで、
それは骨が折れるだけで、決して十分とはまいりません。
ただ深く物を直視する力のある霊のみが、
無際涯のものに無際涯の信を置きます。

メフィストーフェレス

こういう紙は、金や真珠の代わりになるので、
大した便利です。持っているだけのものがわかりますからね！
先ず値段の駆け引きをしたり両替をしたりする必要もなく、
人は好き次第に恋や酒に酔っ払うことが出来る。
硬貨が欲しくなれば両替屋が持っている、
そうして其処になくなればちょいとの間(ま)掘る。
高杯(たかつき)や鎖が競売されて、
すぐに償却を受けた紙幣は、
厚かましく我々を嘲(あざけ)る、疑い深い奴等に恥を搔かせる。
馴れてしまえば他(ほか)のものを欲しがりません。
そうなれば、これから先というものは、帝国内何処へ行っても
宝玉、黄金、紙幣などというものに事を欠く心配はございませんで。

皇 帝

我が帝国の優れた福利がお前方のお陰で得られた、
出来るなら功に譲らぬ賞を遺したい。
領内の地の底はお前方に任せて置く。
お前方は宝の最高の番人だ。
お前方は安全に保護された、広い埋蔵処を心得て居る、
掘り出すときには、お前方の指図に従わせるがよい。
予が宝の頭(かしら)達、これからは一緒になって
お前方の重い役目を楽しんでくれ。
それは、下の世界が、一つになることを喜びとして、
上の世界と相結ぶ場処だ。

大 蔵 卿

我々の間にはいさかいの影さえ差さんようにしようね、
私は魔法遣いを同僚に持つのが好きさ。
(ファウストと共に退場)。

皇 帝

そこで宮中の者に一人一人札(さつ)を遣わそう、
それをどう使うつもりか言って見い。

小 姓(受取りて)。

私は陽気に、晴々と、面白可笑しく暮らします。

他の小姓(同上)。

私はすぐに、女に鎖と指輪とを買ってやります。

侍 従(受けて)。

これからは二倍旨い酒を飲みましょう。

他の小姓(同上)。

賽ころがもう衣囊(かくし)の中でむずむずして居ります。

旗 主(思慮を以て)。

私の城や畑地を受け出します。

他の旗主(同上)。

これは宝です、それを私の数の宝の中へ入れて置きましょう。

皇 帝

わしは新しい事業に向かう興味と勇気とを期待していた。

併しお前達を知っている者には、楽に見当はつく。

わしの眼は外れない、どんなに宝が花を咲かしても、

お前達は昔通りに、前も後も同じことだな。

阿 房(進み近づきつつ)。

下され物でございますな、私にもわけていただきましょう。

皇 帝

生き返って来たところで、遣ればすぐに飲み潰してしまうだろう。

阿 房

魔法の紙片(かみきれ)か！ どうもわけが呑み込めません。

皇 帝

そうだろうとも。どうせ碌な使いようはすまいからな。

阿 房

彼処に又何枚かおっこちました。どうすればいいかしら。

皇 帝

勝手にとって置け。どうせお前に授かったのだ。(退場)

阿 房

五千クロネン俺の手にはいったということになるのかなあ！

メフィストーフェレス

二本足の酒袋奴、又生き返ったか？

阿 房

毎度のことだがな、併し今度ほど旨く行ったことはない。

メフィストーフェレス

ひどく喜んでいるなあ、体中に汗なんかかいて。

阿 房

ちょっと見ておくれ。これで金(かね)に通用するのかね？

メフィストーフェレス

それでお前の咽(のど)や腹の欲しがる物が買えるのだ。

阿 房

畑や家や家畜も買えますかい？

メフィストーフェレス

知れたことさ！出して見ろ、そんなものはみんな買えるから。

阿 房

では、森や猟場や生簀(いけす)のついたお城もかね？

メフィストーフェレス

まちがいなし！

御前がお旦那様になったところを見たいな！

阿 房

今夜は大地主になった夢でも見るか！----(退場)。

メフィストーフェレス(一人にて)。

これでも阿房の智慧を疑う者は誰だ！

暗闇の廊下

ファウスト。メフィストーフェレス。

メフィストーフェレス

君はなぜ僕をこんな陰気な廊下へひきずり込むのですか？

あちらの部屋の中に面白いことが沢山あるじゃありませんか、
色とりどりの殿上人がぎっしり押し合っている中で
悪戯やまやかしの機会がないのですか？

ファウスト

まあそう言うな。あんな事はもうとうの昔、
君は厭き厭きするほどして来ているだろう。
それなのに今、往ったり来たりばかりしているのは、
俺に返事をしたくないために過ぎまい。
併し俺は厭でもしなければならぬ事があるのだ、
宮内卿と侍従とが俺をせき立てる。
カイザーの御意だ、すぐでなければいけない、
ヘレナとパリスを眼前に見たいとおっしゃる、というんでね。
男と女との典型的な像(すがた)を
ありありと直目(ただめ)に見たいという訳なのだ。
早速仕事に取り掛かってくれ！俺は違約を許されないから。

メフィストーフェレス

無茶でしたなあ、軽々しく約束するのは。

ファウスト

大将、君は考えて置かなかったね、
君の術が俺達を何処へ連れて行くかを。
最初に俺達はお上を金持ちにしてあげた、

だから今度は慰みをさせて上げなくてはならんのだ。

メフィストーフェレス

それがすぐ旨く行くものと、君は思っているのですね。
俺達は今、もっと険しい坂を前にして立っているのですぜ、
君はひどく縁遠い境界へ手を出して、
結局は闇雲に新しい借金をするのですぜ、
ヘレナをそんなに易々と、紙で造った
金貨の化物のように呼び出そうと思うなんて。----
そりゃ魔女間抜けだの、ばけ物お化けだの、
取り換え児の小人位なら、僕もすぐに御用立てすることが出来ますがね。
満更棄てたものではないにしろ、悪魔の色女(いろ)では、
半神の女には通用しませんや。

ファウスト

又昔ながらの琴の音と来るね！
君を相手にすると、いつでもあやふやな処へ連れ込まれる。
君はあらゆる故障の親爺(おやじ)だよ、
手伝うたんびに、君は新しい褒美を欲しがるのだ。
一寸ぶつぶつ小声で唱えれば、すぐに出来ることはわかっている、
人が側見(わきみ)をする前に、君はすぐに二人を連れて来られるだろう。

メフィストーフェレス

あんな異教の民は僕にはまるで無関係だ、
あいつ等は別に自分達だけの地獄に住んでいます。
でも一つの手段はある。

ファウスト

聞かせ給え、愚図愚図せずに！

メフィストーフェレス

言いたくはないが、高遠な秘密をうちあけましょう。----
女神達が神さびて、寂寥処に座を占めている、
その神々のめぐりには、場処もなければ、猶更時もない----
この神々のことを話すことは困惑そのものなのです。
それこそ母達です！

ファウスト(愕然として)。

母達か！

メフィストーフェレス

身の毛がよだちますか？

ファウスト

母達！母達！----それはひどく異様に響く。

メフィストーフェレス

そうして実際そうなのです。君達のような無常な者には知られて居らず、
僕達でも滅多に口にしたくはない女神達です。
その住み家へ往くには、深い深い底へもぐり込まなければなりません、
そんなものに用が出来たのは、君が悪いのですよ。

ファウスト

そこへの道は？

メフィストーフェレス

道なんぞありません！踏み分けたもののないところへ、
踏みようのない処を通る道です。君、用意はいいですか？----
あけなければならぬ錠前もなければ門(かんぬき)もない、
君は寂しさの数々に追い廻されるでしょう。
君には凄まじさというもの、寂しさというものがわかっていますか？

ファウスト

そんな言い草は儉約した方が好いと思う、
そろそろ魔女の厨の臭いが、
とうに過ぎ去った昔の臭いが、して来るぜ。
俺も世間との付き合いをしなくてはならなかったではないか？
空しい事を学びもし、空しい事を教えもして来たではないか？----
俺の観ることが出来たままを理性的に語ったときには、
反対は倍も喧(かしま)しく響いて来たものだ。
俺は心に染まぬ馬鹿げた真似を避けて、
寂しい処へ、荒れた処へ、逃れさえしたではないか？
そうしてまるでほほり出されて、一人ぼっちで生きるのが厭さに、
とうとう悪魔にさえ身を委ねたのだ。

メフィストーフェレス

又君が大海(おおうみ)を泳ぎ抜いて、
其処で際涯のないものを観たとしたところで、
君は其処で波又波がやって来るのは見られますね、
縦令(たとい)溺れ沈む懼(おそ)れがあるにしても。
兎に角何かは見られますね。静まり返る海の
緑の中を急ぎ行く海豚(いるか)も見えるでしょう。
雲の過ぎるのも、日も月も星も見えるでしょう。
とわに空虚な遠い境では、君にはまるでなんにも見えないのですぜ。
君が踏みしめる足音もきこえない。
君が憩うべき固いものもまるでないのですぜ。

ファウスト

君は、曾て忠実な新発智(ほち)を騙して来た、あらゆる密儀の導師のうちの
第一人者のような物言いをするね。
ただあべこべなだけだ。君は俺を空虚の中へ送って、
結局其処で俺の術(わざ)と力とを増させるのだ。
俺をあの猫のように取り扱って、
熱火(あつび)の中から自分のために栗をしゃくい出させるのだ。
いいわ！どん底まで窮めてやれ、
君の所謂虚無の中に、俺は一切を発見して見せる。

メフィストーフェレス

君が僕から別れて行く前に、僕は君を褒めてあげます、
確かに貴君は悪魔を知っているお人だ。
さあ、此の鍵をお持ちなさい。

ファウスト

こんなちっぽけな物をか！

メフィストーフェレス

まあ手にお取んなさい、馬鹿にしないで。

ファウスト

俺の手のうちで大きくなる！光る、閃く！

メフィストーフェレス

どんな宝が手にはいったか、早速わかったでしょう。
その鍵が正しい場所を嗅ぎ出してくれましょう、
それについて行きなさい、それが母達の所へ案内しますから。

ファウスト(戦慄しつつ)。

母達の所へ！それは聞く度に電撃のように体に応える！
こんなに耳に逆らうのは、一体何とした言葉だろう？

メフィストーフェレス

君は新しい言葉に閉口するほど、量見が狭いのですか？
とうに聞いたことのある言葉ばかりをきいていたいのですか？
この先どんな響きのものに出逢ったって、閉口するような君でもあるまいに。
君はもう長いこと、不思議千万な物事に馴れて来ているじゃありませんか。

ファウスト

でも俺は凝固の中に至福を求めはしない。
戦慄は人類の最善の得分(とくぶん)だ。
世間がこの感情を薄めてそれをどんなに享け難いものになっているにせよ、
感激してこそ、非常な事が深く人の身に沁みるのだ。

メフィストーフェレス

じゃあ降りてお出なさい！昇れ！といっても好い。
おんなじ事です。既に成れるものに背いて、
縛(ばく)を解かれた、形体の国へお出でなさい！
もうとっくに無くなっているものを見て楽しみなさい。
もやもやした群れが棚引く雲のようにからみ合って来るでしょう。
そのときにはその鍵を振って寄せ付けぬようになさい。

ファウスト(奮然として)。

よし！しっかりとこれを掴むと、新しい力が湧く。
胸が広がる、さあ大事業へ。

メフィストーフェレス

かっかと灼けている三足の鼎(かなえ)が、とうとう、一等深い、
深さの極まるどん底に来たことを君に知らせるでしょう、
その光で、君は母達を見るでしょう、
座っているのもあれば、立ったり歩いたりしているのもある、
その時次第です。形成、転形、
永遠なる意味の永遠なる語り合い、
それを繞(めぐ)ってあらゆる被造物の形象が漂っている。
あれ達には君が見えません、型(かた)しか見えない連中だから。
其処でしっかりと腹をすえなさい、随分あぶない仕事だから。
そうしてまっしぐらにその鼎を目ざして進んで行って、
その鍵で鼎に触るのです！
(ファウスト鍵を持ちて、決然として命ずるが如き態度をなす)。

メフィストーフェレス(彼を見つつ)。

それで宜しい！
それは随いて来る、忠実な僕のように従って来る。
平然として昇って来ると幸運が君を持ち上げて、
あれ達の気が附く前に、君は鼎と一緒に帰っている。
一度それをこちらへ持って来さえすれば、
君は男女の半神を夜の国から喚び出すことが出来る。
君はそういう仕事を敢えてした最初の人だ。
功は成った、そうしてそれをしたのは君なのだ。
それから先は、魔法で扱えば、
香の煙の霧が神々に化けるのです。

ファウスト

そこで差し当たりどうするのだ？

メフィストーフェレス

力をこめて降りようとなさい。
足踏み鳴らして沈むのです、足踏み鳴らして又昇って来るのです。
(ファウスト足踏み鳴らして沈み行く)。

メフィストーフェレス

鍵が旨く先生の用に立ってくれば好いがなあ！
先生、此の世に戻って来られるかどうか、見ものだて。

燈火明るき数々の広間

皇帝と諸侯、あちこちする廷臣。

侍 従(メフィストーフェレスに)

まだ霊を登場させる御約束があるのですぞ。
早く取り掛かって貰いましょう。お上が御待ち兼ねだ。

宮 内 卿

今もお上から御尋ねです。
君！のろのろしていると陛下に無礼になるぜ！

メフィストーフェレス

それだからこそ仲間が出かけたのですよ。
あの男は、どう手を著(つ)ければいいかをちゃんと心得て居て、
引き籠もってこっそり苦心を重ねています、
なかなか並大抵の骨折りでは追い付きません。
美という宝を掘り出そうとする者には、
最高の技術、賢者の魔法が必要ですからね。

宮 内 卿

君達の方でどんな術が要るのか、それは問題外だ、
カイザーのお望みになるは、ただ万事出来上がっているということです。

金髪的女(メフィストーフェレスに)

あなた、ちょっときいてよ！私こんなに白い顔をしているでしょう、
だけど厭な夏になると、こうではなくなるのよ！
茶色がかって赤いぽつぽつが何百となく吹き出して、
この白い肌一面に広がるので、厭になってしまいますの。
お薬を頂戴！

メフィストーフエレス

いけませんねえ！こんな赫(かがや)くような別品さんが
五月になると御宅の虎猫のように斑(まだら)になるなんて。
蛙の卵と蟄(がま)の舌との澄まし汁をとって、
満月の光の下で叮嚀に蒸餾して、
それから月が欠ける頃に手際よく塗って御覧----
春になると斑がなくなって居ますよ。

鳶色の女

大勢押し寄せて来て貴君を取り巻きますわねえ。
私にもどうぞお薬を頂戴ね！霜焼けで
歩くにも踊るにも困りますの。
お辞儀をするときさえ旨く動けませんの。

メフィストーフエレス

失礼ですが私の足で踏まして御覧なさい。

鳶色の女

まあ。それは恋人同士ですることでしょう。

メフィストーフエレス

嬢さん！私が踏むのには、もっと大きな意味があります。
病気が何処にあるにしろ、同じ物は同じ物で！
足は足でなおす。他の局部でも皆同じです。
さあ御寄り！用意！返すには及びません。

鳶色の女(叫びつつ)。

あ、痛(いた)！あ、痛！ぴりぴりすること！きつい踏みようでしたわ、
馬の蹄(ひづめ)のように。

メフィストーフエレス

これで癒(なお)ってお帰んなさい。
これからは踊りも好きなだけ踊られます、
食卓で御馳走を食べ飽きながら、好い人と踏みっこをなさるが好い。

貴 婦 人(押して近寄りつつ)

通して頂戴！苦しくて苦しくてやり切れませんの、
悩みが胸の奥底で煮えくり返ってあばれて居りますわ。
つい昨日まで私の眼遣い一つに幸いを求めていらした方が、
あの女をお饒舌対手にして、私に背中を向けるのですもの。

メフィストーフエレス

難症ですな。だが御聞きなさい。
貴女はその人の側へそっと体をおっつけて行かなくてははいけません。
この炭を持って行って、その人に一本、筋をひいておやんなさい、
袖でも、套衣(まんと)でも、肩でも、何処か出来易いところへ。
奴さん心の中に、しおらしい後悔の、ちくちく痛みを感じずるでしょう。
でも貴女はすぐにその石炭を丸呑みにしなくてははいかん、
水も、酒も、唇に持って行ってはいけませんよ。
男は今夜のうちに、貴女の扉の前で溜息を衝きます。

貴 婦 人

毒じゃありますまいね？

メフィストーフェレス(怒りて)。

尊敬なさい、尊敬すべきものは！

こういう炭を手に入れるには、遠く捜し廻らなくてはならないのです。

これは焚殺(ひあぶり)の薪の炭です、

その薪は昔我々が、今よりもずっと精を出して焚きつけたものでした。

小 姓

私は恋をしています、が、人は私を一人前だと思ってくれません。

メフィストーフェレス(傍を向きて)。

どっちの方に耳を向ければいいんだか、もう俺にはわからん。

(小姓に向かいて)。

君は余り若い女に自分の幸福を賭けては駄目だ、

年増なら君の有り難さがわかるね。----

(他の人々押し合いて近づきて来る)。

やあ、又新手(あらて)か！何というひどい悪戦だろう！

しまいには本当のことを云って切り抜けずばなるまい。

どうも至極の拙策だ！ひどく困ったことになったものだ。----

おお、母達、母達！早速ファウストを放して返してくれ！

(四辺を見廻しながら)。

もう広間の燭火(ともしび)がぼんやりして来た、

御殿中の者がみんな、一度に動き出す。

行儀正しく、あれ達は序列をなして行く、

長い廊下や遠い柱廊(ぎゃれりい)を通して。

やあ！あれ達は、古い騎士の広間の

広々とした処に集まる。はいりきれないぐらいだ。

幅広い壁には垂れ布が垂れめぐらされ、

隅や龕(がん)は武具で飾られている。

此処には魔法の呪文も用がないらしい。

霊どもが場処柄相応、ひとりでに現われるであろう。

騎士の広間

ほの暗き照明。

皇帝並びに廷臣出場しあり。

前 触 れ

狂言の先触れをすると云う、昔ながらの私の仕事が、

霊どもの秘密な支配によって妨げられる。

理に叶った根拠から、このこんがらかった仕組みを

説き明かそうと企てたところで、旨く行きません。

椅子も腰掛けももう出ている。

人はカイザーを丁度壁の前にお据え申した。

壁掛けに織り出した、帝国盛時の戦争を

お上はゆっくり打ちくつろいで御覧になることが出来る。

お上も宮中の方々も、皆さんぐると此処に御座りになる、

後ろの方ではべんちが押し合っている。

霊どもが出ようと云う物凄い時にも、恋人は

恋人の傍になつかしい空席を見つけ出した。

さてこう、一同程よく陣取ったからには、

支度は宜しい、霊どもはいつでも出て来い！

(金笛の響き)。

天文博士

早速狂言をやり出して貰おう、
お上の仰せだ、お前達霊ども、聞きおれ！
もう何の邪魔もない、此処では魔法はお手の物だ。
壁掛けは火で燃えまくれるように消えてしまう。
壁は割れてどんでん返しになる、
奥深い舞台が出来上がるらしい、
一つの明かりが怪しく我々を照らすようだ。
そこで私は前舞台に昇るとしよう。

メフィストフェレス

(後見穴より浮かび出でて)。
此処に居てわしは満場の御最上層に預かりたい、
白(せりふ)を吹き込むのが悪魔の節話術だ。
(天文博士に)。
貴君は星の歩む拍子を知っているお人だ、
私の囁きも大家程度にわかってくれるでしょう。

天文博士

不思議な力によって、此処眼の前に、
ひどくがっしりした古代の神殿建築が出現する。
その昔天を擎(ささ)げたアトラスの神のように
円柱が沢山列をなして此処に立っている。
これなら巖山の重みをも支えるに足るであろう、
たった二本で一つの大きな建物を担っているのだから。

建築家

これが古代様式というものでしょう！私には褒めようがありませんね、
鈍くて、荷が重過ぎるとでもいうべきでしょう。
人は生(なま)なものをば高尚と呼んでいる、仕末に窮しているものをば----偉大と。
私は狭い添え柱の方が好きだ、それは昇ろうと努力している、無際涯だ。
剣形迫持(けんがたせりもち)の天井は精神を高める。
そういう建物が我々には何よりも有難い。

天文博士

敬虔な心で星廻りに恵まれたこの時を受け納れなさい。
魔法の言葉によって理性というものを縛り上げなさい。
その代わりに、広々と自在に動き寄るが好い、
すばらしい、恐れを知らぬ空想の力は。
今その眼で以て御覧なさい、貴君方が不敵にも見たいと望んだものを。
それは不可能だ、それだからこそ信ずるに価するのだ。
ファウスト前舞台の他の側より登り来る。

天文博士

祭司の衣を着けて、青葉の鬘(かつら)を飾って、奇蹟の人が現れる、
その人は信ずるところがあって始めた仕事を、今成し遂げるのだ。
一つの鼎が彼人(あのひと)と一緒にうつろな窟(いわや)からのぼって来る、
私はもう盤から立ち上る香の薫を嗅ぐような気がする。
あの人はこの優れた仕事を祝福するために身繕いする----
この先はただ運良く事が運ぶばかりです。

ファウスト(大きく)

母達よ、御身達の名を以て行う！御身達は

無辺際(むへんがい)の国に玉座(ぎょくざ)を構えて、永遠(とこ永久)に孤寂(こくじ)に、
而(しか)も集(まと)い(を)をなして住む！お身達(みだ)の頭(かぶ)をめぐって、
生(いのち)は無(な)しに而(しか)も動く、生命(いのち)の象(かた)どもが漂(ただよ)っている。
曾(こと)て一度(いちど)鮮(あざ)やかな輝(かがや)きと光(ひかり)との中(なか)にあったものは、
皆(みな)其(その)処(ところ)に動(うご)く。なぜ(なぜ)といえ(いえ)ば、それは永遠(とこ永久)に在(あ)ることを欲(ほ)するからだ。
そうして威力(ゐりか)の普(あまね)き者(もの)御身達(みだ)は、それ(それ)を分(わ)って
或(ある)いは日(ひ)の天幕(てんまく)へ、或(ある)いは夜(よ)の穹窿(きゆうろう)へ遣(はな)す。
その或(ある)者を受(う)け取(と)るのは生(いのち)の優(やさ)しい行路(ぎやうろ)で、
他(ほか)の或(ある)者を探(たづ)ね求(もと)めるのは不敵(ふてき)な魔術士(まじゅつし)だ。
彼(かれ)は吝(お)しむところなく力(ちから)を尽(つく)くして、自信(じゆん)に満(み)ちて、
番人(ばんにん)の欲(ほ)する驚異(きやうい)を眼(め)に見(み)せて遣(はな)るのだ。

天文博士

あの灼熱(しゃくねつ)する鍵(かぎ)が盤(ばん)に触(ふ)れるか触(ふ)れずに、
一つの濛々(もうもう)と立つ霧(きり)が直(ただ)ちに広間(ひろま)を蔽(おほ)う。
霧(きり)は這(は)い込(こ)む、霧(きり)は雲(くも)のよう(よう)に波打(な)つ、
それは舒(の)びたり、卷(ま)いたり、組(く)み合(あ)つたり、別(わか)れたり、並(なら)んだりする。
さあ霊(たま)どもを扱(と)う妙術(めうじゆつ)を御覧(ごらん)なさい！
雲(くも)が動(うご)く度(ほど)に、それは音(おと)楽(がく)となる、
虚空(こくう)に漂(ただよ)う響(こ)きから何(なん)とも知(し)り難(がた)いもの(もの)が湧(わ)き出(で)し、
雲(くも)が靡(なび)き渡(わた)ると、すべ(すべ)てが旋(ま)律(りつ)となる。
柱身(はしらみ)もトリグリューフエ(トリグリューフエ)も響(こ)きを立(た)て、
神(かみ)殿(だん)全(ぜん)体(たい)が歌(うた)うか(か)とさ(さ)え思(おも)われる。
靄(もや)は沈(しず)む。その軽(かろ)い薄紗(はくさ)から
一(ひと)人の美(うつく)しい若(わか)者が足拍子(あしはし)をと(と)って歩(あ)み出(で)る。
此(こ)処(ところ)で私(わたし)の役目(やくめ)は沈黙(しんもく)する、あれ(あれ)の名(な)をい(い)う必要(ひつや)はない。
誰(たれ)が艶男(えんなん)(やさおとこ)のパリス(パリス)を知(し)らぬ者(もの)があ(あ)らうか！
パリス(パリス)現(あら)われ出(で)ず。

貴婦人

まあ！咲(さ)きそめる若(わか)者の力(ちから)の、何(なん)という輝(かが)かしさ(さ)でしょう！

第二の貴婦人

もぎだての、汁気(じゆけ)の滴(た)る桃(もも)のよう(よう)ですこと！

第三の貴婦人

あの華奢(わしゃ)な線(せん)をひいた、甘(あま)そうに膨(ふ)らんだ唇(くは)！

第四の貴婦人

貴女(あなた)はあんな杯(さかづき)に御口(ごくち)をおつ(お)けな(な)さ(さ)りた(た)いでしょ(しょう)うね？

第五の貴婦人

全(ぜん)く可(かな)哀(あ)いわねえ、上品(しんぴん)と(と)はいえ(え)ないけれ(けれ)ど。

第六の貴婦人

もう少(すこ)し身(み)のこなし(こなし)が意気(いき)だ(だ)つたら(たら)と思(おも)いますわ。

騎士

どうも羊飼(やぎかひ)いの小物(せうぶつ)の臭(にお)いがす(す)るよう(よう)ですな、
貴公子(きこうし)らしいところ(ところ)もまる(まる)で、殿上風(てんじやうふう)もまる(まる)であります。

他の騎士

さよう！半裸(はんぬだ)で見(み)ればあ(あ)の若(わか)者は成程(せいじやう)美(うつく)しいが、

先ず鎧を著せて見なくてはわかりませんな！

貴 婦 人

彼(あれ)は腰をかけますわ、嫺(しな)やかに、気持よさそうに。

騎 士

あの膝の上は乗り心地がよかろうという訳ですか？

他の貴婦人

まあ、しおらしく腕を頭のうしろに廻しますわ。

侍 従

不作法な！許して置かれんことすな！

貴 婦 人

殿方は何につけてもあら探しが御上手ですわね。

同じ侍従

カイザーの御前でだらしなく寝そべるような真似をしおって！

貴 婦 人

あれはただ芸ですわ！まるで一人でいる積もりなのよ。

同じ侍従

狂言そのものが、此处では礼儀に叶わなくてははいけません。

貴 婦 人

すやすやとあの艶男(やさおとこ)は眠入りましたわ。

同じ侍従

すぐに軒をかき出すでしょう、地で行っていますな、まるつきり地で！

若き貴婦人(恍惚として)。

あの香の煙に、あんなに交じって匂って来るのは何でしょう？

それは私の胸の奥底までせいせいさせますわ。

年長けたる貴婦人

本当ね！微かな匂いが心の奥まで通(とお)って来るのね、あれはあの人から来るのですわ。

最も年長けたる貴婦人

あれは伸び盛りの花なのです。

若者の体の中で醸されて霊香になって、
空気のようにまわり一面に広がるのですよ。

ヘレナ現われ出ず。

メフィストーフエレス

こいつがあんな女だな！これなら俺なんぞは平気だ。
綺麗は綺麗だが、俺の心を動かすところがない。

天文博士

私には、この度こそもう云うべき言葉もない、
名誉ある男として、私は今それを白状する、告白する。

美女が現れる。焰の舌が何になる！
美しさのことは昔からいろいろに歌われて来た、
あれを見せられては、誰でも心が空(から)になる、
あれを我が物にした人は、あまりに仕合わせにされ過ぎた。

ファウスト

俺の眼はまだついておろうか？美の泉が世にも豊かに
心の奥深く灌(そそ)がれて沁みて、己(おのれ)の姿を現わして来るのか？
恐ろしかった俺の旅路に、尊い限りの土産があった、
世界はこれまでどんなにか空しく、解かれぬものに俺に見えただろう！
それが今はどうなったか、俺が祭司になってから此方は？
始めて願うに価するもの、根のあるもの、長持ちするものとなった！
生命の、呼吸する力が俺から消えて失せるが好い、
若しもこの俺が、お前がなくて済んだ世に逆戻りするようなら！----
昔俺を夢中にしたあの美しい姿、
魔の鏡に映って嬉しがらせてくれた姿も、
ただ、今見る美の泡沫の影であった！----
お前こそそれだ、俺はお前に、ある限りの力の発動、
熱情の精霊を捧げる、
お前に、愛着と熱慕と崇拜と悩乱とを捧げる。

メフィストーフェレス(箱の中より)。

まあしっかりしなさい、役を忘れちゃ駄目ですぜ！

年長けたる貴婦人

丈(せい)もあり姿も好いが、頭が小さ過ぎますわね。

若き貴婦人

まあ足を見て御覧なさいよ！あんな野暮に大きな足なんてあるでしょうか！

外交官

上っ方の奥方にあんな恰好のを拝見したことがあります。
頭から足まで美しいと私は思います。

宮内官

女は寝ている男の傍へ、ずるく優しく近寄りますね。

貴婦人

若く清らかな姿に並べて見ると、何て醜いでしょうね？

詩人

男は女の美の照り返しを受けています。

貴婦人

エンデュミオンとルーナ！絵の通りですわね！

同じ詩人

全くですよ！女神は身を屈めるようですね、
上にかぶさって、男の息を吸おうとする。
美しいね！----接吻！----量器(はかり)は盈(み)ちた。

女監

まあ、沢山の人様の前で！あんまり気違いじみて居りますわ！

ファウスト

勿体ない御情けをあんな小僧奴に！----

メフィストーフェレス

化物に、勝手をさして置きなさい。

宮内官

女はそっと立ち退く、足元も軽く、男は眼を醒ます。

貴婦人

女は振り返りますね！きっとそうだろうと思いました。

宮内官

男はびっくりする！奇蹟に逢ったのですからね。

貴婦人

あの女には奇蹟でも何でもありませんわ、眼の前に見ることは。

宮内官

しとやかそうに、女は男の方へ戻って行きます。

貴婦人

わかっていますわ、女が男を仕込むのですわ。
こういう時には、男はみんな馬鹿なものよ、
自分が最初の男だなぞと思わないものでもないわ。

騎士

私の気に入る分には構わんでしょう！位が備わって品(しな)がある！

貴婦人

浮気女が！こんなのを私は卑しいと申しますわ！

小姓

あの男の身代わりになりたいなあ！

宮内官

あんな網になら、誰が罹(かか)らずにいられますか？

貴婦人

あの宝はいろんな人の手から手へ渡ったのです、
鍍金も大分剥けていますわ。

他の貴婦人

十の年から手におえなかったのよ。

騎士

其の折に応じて、誰でも一等いいものを取るのです。
私ならこの美しいお古(ふる)に執心しますな。

学者

私は女をはっきり見ているが、それでも無遠慮に白状すれば、
あれが本物かどうかは疑わしいですな。

現前のものは人を誘惑して誇張に陥れる、
私は何よりも書き物に縋ります。
其処で読んで見ると----あの女は実際
トローヤの白髯連一同に特別に気に入った、とある。
そうして、私の見るところ、それは完全にこの場合に当て嵌まるですな----
私は若くはない、それでもあの女は私の気に入る。

天文博士

もう少年ではなくなった！大胆な英雄になって、
あれは女を抱きしめる、女は身を防ぐことも出来ない。
腕に力が加わってあれは女を高々と抱き上げる、
敢えて連れて退こうとするのか？

ファウスト

不敵な痴者(たわけ)奴！
敢えてする気だな！聴かん！待て！あんまりだぞ！

メフィストーフェレス

君が自分でやっているのじゃありませんか、霊どもの道化芝居を！

天文博士

ただ一言を加える！これまで見た所では、
私はこの狂言をヘレナの掠奪と名づけます。

ファウスト

なに、掠奪だと！俺が安閑として此の場にいると思うか？
この鍵はまだ俺の手のうちにあるではないか？
それは寂しき数々の戦慄と波浪とを凌いで
この堅固な岸へ俺を連れて来てくれた。
此処に俺は足を踏みしめる！此処に現実の世界がある。
此処に立って霊は霊どもと闘い、
偉大なる二重の王国を準備することが出来るのだ。
あの女はあんなに遠くにいた、それがこれ以上近づけようのない処にいる！
俺は女を救う、すると女は二重に俺のものとなる。
敢えてしよう！お身等、母達！母達！許してくれ！
あの女を味わい知った者は、あれなしには生きられないのだ。

天文博士

何をするのです、ファウストさん！ファウストさん！----無理矢理に
女を攫(つか)まえる、と、もうあの姿が濁って来る。
鍵をかえして若者の方へ向ける、
それが男に触る！----ああ大変だ、大変だ！危ない！おしまいだ！
(爆発。ファウスト地上に倒る。霊ども雲となりて消ゆ)。

メフィストーフェレス

(ファウストを肩にかけて)。
さあ大変なことになった！馬鹿者どもを背負い込むと、
とどのつまりは悪魔でさえ損をするて。
(闇黒。騒擾。)